

氏名	本間 千尋
ヨミガナ	ホンマ チヒロ
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博音第338号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 P.-A.-A. ド・ピイスのシャンソン創作と「カヴォー・モデルヌ」への関与

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	大森 晋輔
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	畑 瞬一郎
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	杉本 和寛
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽研究科)	侘美 真理
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽研究科)	針貝 真理子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	野々下 由香里
(副査)	信州大学	教授	(人文学部)	吉田 正明

(論文内容の要旨)

本論文では、1806年から1816年にかけてパリで活動した歌の会「カヴォー・モデルヌ」の様相を、創設者のひとりであるピエール＝アントワヌ＝オーギュスタン・ド・ピイスを軸に考察する。「カヴォー・モデルヌ」は著名な会で先行研究でも取り上げられているが、いまだ十分に考察がなされたとはいえない。その会員であり会長歴任者でもあるピイスの、この会への深い関与を考慮に入れれば、彼にまつわる資料からこの会を考察する重要性は十分にある。そこで本論文では、ピイスに関連した資料から「カヴォー・モデルヌ」の新たな側面を見出すことと、ピイスの作品から同時代のパリの実情を明らかにすることを試みる。

シャンソンという文化がフランス人に根付いていることは、ブラジエら多くの人物が証言している。ルソーはこの歌曲を、「素晴らしい主題が展開し、例えば食卓のような〔中略〕打ちくつろいだ場で歌うための旋律が付け加えられているもの」と定義する。「カヴォー・モデルヌ」をはじめとした酒食とシャンソンを楽しむ集まりは、彼の言う「打ちくつろいだ場」を体現したものであった。その源泉は、1730年初頭に始まった、カヴォーと呼ばれる私的な会合にある。詩人や文筆家、さらにはラモーら音楽家たちが集まり、酒食と風刺詩を楽しんだ。この会は中断と復活を経て、1777年に集結してしまう。

カヴォーの継承を宣言する会は、1796年に始まる劇作家たちの集まりを待たなければならない。「ディネ・ドゥ・ヴォードヴィル」と名付けられたこの会は、ピイスらヴォードヴィル座の劇作家たちを中心に始められた。彼らは月に一度集まって題目に基づいたシャンソンを歌い、その作品は月刊機関誌にまとめられた。19世紀になり彼らの集まりが途絶えた後、1806年に「カヴォー・モデルヌ」が始められる。この会は各地に購読者を持ち、彼らが自作のシャンソンを投稿することを認めた。彼らは機関誌だけでなく、旋律辞典『カヴォーの鍵』も刊行した。彼らが1815年にその集まりを終えた後も、カヴォーを継承する一連の試みが、20世紀初頭まで続くことになる。

この1800年前後のシャンソン文化に大きく寄与したのが、ピイスである。伝統的な貴族の家系に生まれた彼は、1775年頃より劇作品で成功を収める。18世紀末にはヴォードヴィル座を創設するが、のちにパリ郊外へと亡命する。恐怖政治後にパリに戻ると、活発に詩歌を作った。一方でパリ警視庁初代事務局長にも任命され、様々な権力者に重用された。彼のシャンソンは冗長で風刺性が薄いのが、それは彼が当時を代表する風見鶏のひとりだったためである。約10年で権力者が変わる不安定な時代においては、あらゆる権力者に調子を合わせる風見鶏として生きることが、自身の身を守る術であった。

「カヴォー・モデルヌ」は、美食の集いとして創始された。これはグリモ・ド・ラ・レニエールの強い関

与のためだが、彼はすぐにこの集いから手を引くことになる。その結果「カヴォー・モデルヌ」は美食学の教化という目的を失ったが、18世紀のカヴォー同様、美食を囲みシャンソンを歌いながら陽気な時間を過ごすことは忘れなかった。この会には地方の歌の会幹部や、音楽家たちも招待されている。

ピイスが会長に就任したのは、1811年7月から1812年末のことである。就任直後、彼は体調不良を理由に湯治に出かけてしまう。しかし、1812年にパリに戻ると、出版者の飲食費滞納に対峙することになる。彼は会長としてシャンソニエたちと協議し、彼らと出版者との橋渡しを担ったことが、当時の手稿資料から明らかになった。

ピイスが「カヴォー・モデルヌ」で披露したシャンソンのうち、特徴的なのが、社会的つながりのシャンソンと、政治シャンソンの2つできるだろう。彼はこの会のシャンソニエたちに「カンカル派」という名を与え、カヴォーの先人や年長者に対する尊敬を、他のシャンソニエとともに歌った。

1810年以降は、権力者を称賛するシャンソンを歌い始める。始めは「カヴォー・モデルヌ」の会合の外で歌っていたが、1811年3月のローマ王誕生以降、定期会合でも率先して歌う。特に1814年4月の王政復古の際には、1度の会合で4つのシャンソンを歌った。そのうち《フランス人の「ゴッド・セーブ・ザ・キング」》は、複数の音楽家に編曲され、劇場やコンサートでも歌われたという。ただし、彼らの政治シャンソンがきっかけで、会員間で不和が生じ、「カヴォー・モデルヌ」は終結を余儀なくされた。

この二つの題材は、「カヴォー・モデルヌ」における、友人たちとの社会的つながりを喜び歌う側面と、権力者側の要望に応え、発信する側面との併存を示唆する。私的な集いとして始まったこの会は、時を経るにつれ、公論の先導を期待される。その結果徐々に政治シャンソンが浸透し、イデオロギー対立が顕在化し、終結を招くことになる。ピイスのシャンソンの変遷は、この過程を如実に表明している。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、1806年から1816年にかけてパリで活動した歌の会「カヴォー・モデルヌ」の実態を、その創設者の一人であるド・ピイス（以下ピイス）を軸に考察したものである。当時の不安定な政治体制のなかでも次々に公職に就いて時の政府に重用され、無節操な「風見鶏」として名を馳せたピイスという人物は、一方でこの会の会長職を担い、多くのシャンソンを作った重要人物であった。詩人や文筆家、さらには音楽家ラモーなども集い、酒食と詩作に耽ったこの会については先行研究でも触れられているが、多くは概略的な記述にとどまり、作品名や人物名、年代に齟齬も多く、その蓄積は十全であるとは言いがたい。本論文の独自性は、今では忘れられたピイスという人物に焦点を当てることではじめて見えてくるこの会のありようが、フランスで綿密に一次資料を調査した結果をもとに記述されているところにある。サブカルチャー的な側面が濃いシャンソンは、本国はもとより日本でもほとんど論究の対象とされてこなかった。本論文は19世紀初頭のパリの社会情勢を踏まえたものであり、シャンソンを通じた社会文化史という観点からも、上述の空隙を埋める貴重な研究といえる。

もっとも、改善の余地が望まれる点はいくつかある。第一に、ピイスの実作に迫っているにもかかわらず、歌の引用のほとんどが単なる紹介にとどまるもので作品そのものの検討が不十分に思われる点、第二に、結論がやや不明確で、この会の精神がのちにどのように受け継がれていったのかについての記述が不十分な点である。本論によれば、「カヴォー・モデルヌ」は「政治性」が持ち込まれたことで終焉を迎えたとされているが、そうした要素を排除した上に成り立っていたこの会そのものの「政治性」についても、いまま少し自覚的であってもよかったのではないだろうか。また、多くの一次資料を渉猟しているにもかかわらず、本論文には当時の会誌などの図版資料が乏しいが、この点を充実させていけば記述にさらに厚みと説得力が増しただろう。

しかし、そうした欠点は、内外でも類を見ないほど詳細にこの会の実態に迫っている本論文の価値を損なうものではない。音楽文化学研究という観点において本論文が示した新たな可能性に鑑みて学位授与に十分ふさわしいものと判断し、合格とした。